特18
948

用心譬喻草 全

生島養老翁 謄
山田俊卿翁 訂正

施販者
生島嘉久次郎刊行

267
795

特18
948

小引

家の本は身にありこは聖人のゝたまへることにて人は各わが家を大切こ思ひ共に家に在る人は各その身を脩め道を行ふて先祖より受けたる家を力を協せて守るこそよけれされば家の立つ立たぬ纔くぬは皆人々の行ひに因るにぞあるこゝに家の長こして此ことは明暁られたる生島養老翁は此用心譬喩草てふ貴きふみを書寫されて孫に傳へはやこて秘めおきいつの頃にか其愛女今は堺に住まはるゝ同苗嘉次郎ぬしの妻なる人に與へむこて开が持てる衣筐のうちにそこ收めおかれき妻女は過ぎしころ之を看出し其が尾に明治十有七年九月上旬寫之生島嘉三郎所有こ記しあるを以て父ぎみの心したまひしこ知り讀みもて尊く感じ居しをおのれ例月十一日この邸に心學道話の講釋にゆくをもて此ほこ妻女よりそれを聞き請ひて一覽せしにさしも尊きふみにしあればこは印刷して版本こなし衆くの人に汎く

13
6か
45
内交
瀋

讀まさば世の益にやならむ御身の功德にやならむ一人に私したまはむよりは施本として人々に頒ちたまへと勸めけるに妻女は开はよきことに侍るとて良人なる嘉久次郎ぬしに圖りしに是れまた同意したまひぬればいざとて出版にかゝられき嘉久次郎ぬしの意はこの書成るを告げなば同じ家居の人たちは言ふもさらなり家居の外のうからやから家に出で入る人たち將た他の頒つを望む人たちへも頒ちたまへることになむあるさるにてもあなたふと世は文明に進むといへど道を行ふ人まれなるに明るき家の窟の下よりほの明う光さゝぼ啻に生島氏の家居のみならで曙の光り初めかや大御神の岩戸出でましたるにも比べなむ功しにぞあるあな大人の美きこと擧げたまひしは我身も共に美きことなせしが如くあやかりて嬉しみなむかしあなたふと〳〵

二

壬子孟春　山田俊卿　誌

序

老の涙靜にて、徒然なるまゝ、つら〳〵世の中思ふに取るべき法もなく、又捨べき事もなし。實に塞翁が言葉の如く、善も善ならず、惡も惡ならず、只物に應じ時に隨ひて用捨は有るべき事なり。古語に、莫耶が劍は利しといへども、草を刈るには鎌にはしかじ、虎は猛しといへども、鼠を捕るには猫にはしかず、鷹はよく飛鳥をも捕るといへども、魚を捕るには鵜にしかず、是を思へば、只木匠の木を遣ふ如くに、夫々用ふる時は事もなし。元より不變寶は、神儒佛の三教なり。されども、玉磨かざれば寶とならず、人も學ばざれば道をしらず、誠に此三教の道を能く學ぶ時は、知識賢人と成り、學ばざれば是愚人小人なり。美食ありといへども食せざれば其味を知らず、藥の病を治する事はしれども、學の能く身を脩め、人を治め

三

心を正しくやすんずるを知らざるは、畢竟道に寄らざる故なれば、子孫の爲に少しの便りにもならんかと平生心の用ひ樣を書きつゞりて、家内用心集と號けあたへしが、又見れば事たらず、又思へば世の中は皆勤に依て、貧者は福者と成り、愚人は智者となり、惡人は善人と成り、邪は正と成り、煩惱は菩提と成り、凡夫も神と成り、佛となる事、是皆其道を學び、修行を勤むる功による事うたがひなし。此故に子孫をそだてもりたつる事肝要なり。子孫人柄よければ家もおこり、人柄惡しければ家も衰ふ、是皆人のしる事なれば、大家小家とも誰か子孫のよきを願はざるべき。然るに子孫生れながらにしてよきは稀なり、必教訓によるべし。其教訓の法は、幼稚の時より、第一に父兄につかへ、尊く年たけたる人をば敬ふ道をしらしめ、扨言語は僞なき樣ごいましめ、事を勤るには怠らぬ樣にと戒め

人に交るには無禮なき樣にと戒め、朝夕出入には常に心を付けて、みだりに他行を許すべからず。飲食衣類をは常々驕を制して、自由に過分をなさしむべからず。一切無益の翫物をすき好みて、日を費す事あらしむべからず。古より朱に近づけば赤く、墨に近づけば黑しといへり。假にも遊女博奕の場に遊ばしむべからず、輕薄浮氣之輩に交らしむべからず、常に學問をさせて聖賢の道をしらしむべし然らざれば、其事の名を顯し、世にも用ひられ、身を守り家を持つ事などかなるべき。誰か子孫を愛せぬはなき樣なれども、ほんしやうの愚なれば、あいにおぼれ、甘き毒を食せ、氣儘にあまやかすゆゑ、成長するに隨ひて心根惡敷くなり、父兄のしめしも用ひず、却て腹立異見をいふものをば、敵の樣に思ひ利よくは日々に長じ、酒食好物におぼれ、むなしくなる也。木も若め之時分は、つめにてつ

みかく程の柔らかなるに、大木に成りては斧まさかりを用ひざれば其枝を切取事あたはず。又すなほに成長するには、添木をなし置けば、ろくに生じ木ぶり能くそだつものなり。孔子も、子をあいせば苦勞させよと宣へり、此故に日用の勤方を書き集め、用心に譬喩物語と號けて愚なる子弟にあたふる而已

用心譬喩草

笑月翁著

附教訓詠歌

目錄

精勤用心
日用食物
養生
物ニハ有變
願有時
世間交
恕之字
他行
時節
精勤長壽
放心誠心
服藥
患難
音信贈答
人評判
物忘
諫言
陰德

目錄畢

佛像堂塔建立　修行
念佛咒陀羅尼　堪忍
善進　靜坐
智慧　心事一般
誹謗　除二妄念一
布施　受戒
燒香
家內用心集目次に寄狂歌

用心譬喩草

生島養老翁謄
山田俊卿翁訂正

精勤用心之事

古人の語に、一生の寶は勤に在りといへり。故に家業を勤むる事、たとへば日月晝夜に廻りて止まり給はざるが如く、日の始めより年の終り迄、毎日怠らず勤め行ふべき事なり。夜は月の缺盈に倣ひ夜半までも勤め、或は宵よりも休みて、其時に應じて宜しく勤むべきものなり。

夫れ勤めと云ふは、家業ばかりを晝夜働くのみにあらず。三教道をも學び、或は親族朋友の交りをも程好くし、すべて世間の義理をか

ゝぬ樣に、無益の事には少しも暇の費ぬ樣にするを、晝夜間斷なき善き勤めこは云ふべきなり。

元より、天地の氣を受けて生れたる者なれば、常に天の道、地の理を法手本こなし、晝夜勤むる時は、天地の道に隨ふが故に、自から災難も除き、諸事願ひも叶ひ、無病安躰にて、子孫長久に榮ゑ、老の樂を得べきものなり。

然るに此理を辨へざれば、家業を怠り、世間の義理をも缺きて、勤めあしき故、士は弓馬の道にくらく、出家こ成りて經陀羅尼をも覺ゑず、百姓は耕作にうとく、町人は商の筋をしらぬ事は、皆我家の業を勤めずして、無益なる遊藝を好む故に、侍は知行俸祿にはなれ町人、百姓は家を失ふ事、皆常に心の用ひ樣あしく、家業を麁末にする故なり。

古語に、過てば改むるに憚る事なかれ、改めざるを過ちこすこあり此改むるこ云ふは、たこへば、十里の道、九里行き、或は其門まで行きても、我を殺さんこするもの有る時は、速に歸るべし。斯の如く、惡敷きこ聞かば、則ち改むる事なり。然るに、殺さるゝこ聞きながら、遠方爰まで來て歸る事殘り多きこて、內へ入りて殺さるゝは、是れ求めての過ちなり、爰を能く辨へて、あしきこ聞かば早く改め、無益なる遊藝をやめて、家の業を以て樂こし、道を油斷なく勤むる時な侍は忠こなり立身有るべし、沙門は出世して知識こ成りて、町人百姓は富て且樂しむべし。さすれば、國家の爲め、身の爲め、又た世間の法手本こ成りて、先祖の名をもあげ、眞の善き人こ成るべし。

精勤長壽用心之事

家業を間斷なく勤むる事、たとへば、門の樞を虫の蠹まざるが如く又流水のくちざるが如し、何程清き水も、汲みて久しく置けば、くちて虫を生ず、又良き材木も、數年重ね置けば、蛀ひて朽つるものなり。

又人の身躰を見るに、腹は衣服を重ねて、働きもなき故に、皮薄く柔かなり、手は常に使ふが故に、皮も厚く強し。足は身をのせて千里をも運ぶ故に、強うして健かなり。

此理を辨へて高貴の人より、賤が身に及ぶまで、藝能家業を以て身分相應に働く時は、食を消し氣血循りて、自から無病堅固に成べき事疑ひなし。

太公望曰、勤は價なき寶なりと、此文を常に覺にて、間斷なく勤むる時は、貴賤僧俗、男女ともに、自然と福壽備るべき事なり。

養生用心之事

身の養生をば、老若、僧俗ともに平生第一にすべき事なり。養生はたとへば、良き家を修覆するが如く、既に倒れんとする家も修理を能くすれば、幾年も保つものなり。故に何程弱き生れの人も、養生をよくすれば病を除きて長命と成るべき事なり。

たとへば燈火に油すくなき時は、燈心を細くして、風の當らぬ樣に圍ひを能くすれば、久しく保ちて消ねざるが如し。

又生れの實性なる者も養生あしければ、病人短命なる事、たとへば燈火に燈心を多く入れて、風の吹く處に置けば、油がつきて、早く火の消ゆるが如し。

古人の語に、人病ありて醫を求むるは、渴して井を掘るが如し、と

云へり。

故に、平生若き時より心がけて、こわきもの、冷にたる物、飽食をせずして、氣まめに衣服を着替へ、風寒暑濕を除き、酒と色とをはぶき、無益の妄念を去り、喜怒哀樂愛惡欲の七情を程よくつゝしみ常に能く身を使はゞ、自づから、病を除き堅固に成りて、老の樂みを得べき者なり。

小兒保養の事、常の人は、子を愛し過ぎて、無養生なる事多し、三歳までは、乳味を用ひ、齒を生じては、粥か柔かなる食を折々くはすべし。野菜は、よき物にて少しづゝ用ひよ、魚鳥は、やわらかにても消しがたき故に無用たるべし。總じて小兒は甘き食物を除きてよし、疳の字を疒冠に甘といふ字を書を辨へ知るべし。

又小兒の餘り啼かぬもあしかるべし、一日に二三度程啼くは、大人

謠ひなどうたふが如くにて、氣を引き立て脾胃をすかし却て養生に成るべき事なり。然るに少しも啼せぬ爲めとて、干菓子生菓子、炒物などくらはす事、無養生たるべし。大人さへ干菓子、炒菓子類は消しかぬる物を、小兒の弱きに食はすれば、必らず病人と成るべし又十四五歳までは、衣裳の脇の下を、明けて氣の通ずる樣に、古人教へ置き給ひしに其理を知らずして、幼少より風を厭ひて留袖にするども、十四五歳までより下は廣袖口を明けてよかるべし。如斯、古よりの習はしの通りに、生れ落より心をつけて能く保養すれば、自然と、無病にて成長すべき者なり。

又鹽漬の魚鳥、或は古き味噌漬の類は、年を經ても替らざるを考へ見れば、其性しまりて消し難き物を、脾胃の弱き病人に用ふる事は斟酌有るべき事なり、弱き人には、只消し易きやわらかなる粥か、

麥飯の類にて保養よかるべし。古來鹽漬はよきと云ひ傳へても、爰を考へて、病症に因て氣をつけ用捨有るべき事なり。

日用食物用心之事

食物は日用身命を養ふ元なれば、少しの物にても食ひ合せの善惡を知るべき事なり。たとへば、斑猫砒霜石は、大毒にて、人を殺すといふ事、皆人の知るが故に、誰も食する者なし。然るに、朝夕食する物にても、取合せを知らざれば毒となりて、頓死、或は食傷して病人と成る事を辨へず、古來食合せの惡敷物は俗近きは日用食合せ其外醫書に有といへども、見ざれば益なし、又書にのらざる物にて食傷して死に及びたる者、見聞する所を左に記す者なり。

砂糖　竹の子、ちさ、りんご、小ゑび、ふな、べんけい草

山鷄　そばきり　なつとう

酒後　じゆくし柿、けしな　くるみ、もち米

蕎麥　すい瓜、きじ　くじら、山鳥

雉子　木くらげ、なつとう　くるみ、山ごり

鮒　せり、にはとり、きじ、さたう、かんざう、にんにく

蟹　ねぶ、なつとう、みかん、にんにく、じゆくし柿

蕎麥切を食して、即ち湯風呂に入れば、卒中風を煩ひて死す。猶ほ間もなくはうれん草、又淺漬を食する事深く忌むべし。

鳴　くるみ、きくらげ　なつとう

鯰　あづき、白瓜　かみのけ、みつ

田螺　ごま　けし

麵類　はじかみ　びはのみ

薊菜　こせう喰合せすれば毛穴より血流れ死す

右の喰合せ慎むべし、

たとへば、朝夕の食事たりといへども藥に成り毒となる事は多少の加減による事なり。飯に水少くすればこわき飯となりて脾胃を破る又水多くすれば粥と成て五臓を大きに養ふなり、或は飯に糀を參分入れては酢と成り、六分入れては酒と成り、等分にすれば醴と成る如此多少に因て同じ物各別と成る事なれば、常に心を用ひて料理獻立の取合吟味して必珍しき料理獻立替りたる事をばせまじき事なり勿論飲食は節を以て主とすと云ひて、竹に節の有る如くに程よく其身に應じてせざれば、病人と成るべし。慎みの第一なり。

放心誠心之事

誰も皆放心する事なかれ。其放心とは、我心むねに納まらずして方々へ散て音を聞くにも耳に入らず、物を見れども見ず、たとへば

獨子の手を取りて、流れの早き川を渡る時、物の落るをこらんとて子供の手を放し子の流るゝを辨へざるが如し。常に心をむねに納むる時は、落つる物より子の大切なる事を辨へて手をば放す間敷き事なり、放心なる者を、狐狸もたぶらかすものなり。故に夜道、遠道淋しき處にては、一心に佛名咒陀羅尼を念ぜよと教ふるも畢竟は放心の誠とする所なり、放心は愚かなる人に多く有る事なり。

遠方に居る子などを深く案じ思ふ時は、人の言葉も耳に入らず、手に取る物をも取落す事。是皆本心散亂して放心なるゆゑなり。此故に學問藝能ある在家出家ともに放心なき樣に慎みて、常に心をば胸に納め、氣をば丹田（臍下の事）に下して勤むべきことなり。孟子の語に、學問の道他なし、其放心を求むる而已と云々。如斯何れの道にも放心は大きに嫌ふ事なり。

譬へば家内妻子等見ねざる時は方々尋ね求むる事なり。然るに我身の主なる一心の散りみだれてなきを尋ね求めざる事は至て愚なる事なり。

服薬用心之事

薬は聖人が薬性の理を考へ給ひて、病に應じて方を組み置き給ひし物なれば、能く慎み敬ひて大切に用ふべき事なり。

譬へば咽に金物類たちしには、釘貫を焼きて茶碗に水を入れて、其中へ指入る氣味を移して其水を呑み、又竹木類のたちしには、斧を焼き前の如く氣味を移し呑みて則ぬくる、又鼠の喰ひて痛むには、猫のよだれをつけて癒ゆ、或は物に恐れて氣沉み死に及ばんとする時は、自然と上りたる梁の上の塵を取りて、鼻の穴に吹き入れて蘇生す。

薬に用ふる程の物には、何れも氣味、温冷、天地、陰陽の氣の受けやうに因て、別々に其理備るもの故に、病に應じて能く用ふる時は治せざる事はなしと雖も、庸醫は薬性も病症も氣味寒熱の道理をも辨へず、只今日の渡世と心得薬數多く與ふる故、薬は人を殺さぬとも其術病に應ぜざれば乞にて命を取るに異ならず、故に一廻り用ひて應ぜぬ薬は、却て毒と成りて病かさむものなれば、薬を止めて用ふる事なかれ。

古人の語にも、病ありて薬を用ひざるは、中の療治に當るといへり爰を辨へて大切の病人には、老巧ある良醫を求めて、始終病狀を細かに告げ知らせ療治を受くべし。

若し此理に違ふ時は、親には不孝、師君へは不忠、子弟には無慈と成るべし。能く慎しみたまへ。

又藥は煎じやう大切なり。良藥にても、せんじやうと水あしければ益なし。故に良き井の水を朝早く汲みたるを井華水と云ひて上水なり。是れを用ふべし。次には汲みたての水を用ひてよし、汲かけには、生氣有りて、茶碗か錫の器に入れて忽ちに水氣汗の如く外へ通るものなり。

誠に、命程大切なるものはなきに、藥水は左程吟味もなく、榮耀なる茶の湯物などに深く吟味するはよしなき事なり。

さて、又煎じ樣は、譬へば酒糟をむし、其湯氣に氣味備はりて燒酒と成るが如し。藥の氣味も左の如く、煎ずる湯氣ふたへ登りて再び中に落入り、其氣味煎じ水に備はりて病を治する者なり。然るに、鍋の蓋を取り除けて煎ずるは、藥の氣味のぬけたる湯を呑むが如くにて、少しもきかば不思議なり。此理を辨へて、蓋を取らずに口を

も塞ぎ氣味の少しももれぬ樣に煎ずれば一服用ひても効し有るべき事なり。故に假りに、秤をこしらへ、水一盃の所に、半盃の所へ印を付け、目にかけ蓋を度々あけず、氣味ぬけざる樣にせんじ用ふべし。

勿論、火加減は、外邪發散の藥をば、火を強くして煎じ、內傷保養の藥をば、火をよわく靜に煎じ用ひてよしと、古人名醫も敎へ給へり。

物には有變用心の事

何事によらず物には變ある事を兼て辨へ知りて心を動す間敷事なり たとへば火をば水にて消し、火にて消す理はなきと雖も、雷火に水をかくれば却て盛になり、此方より燃に火を加ふれば、卽ち消ゆるなり、又水は下に出で、火は高く燥く所より出づる理なれども、水

は高山より流れ出で、火は水中の石より出づるなり。又變を云へば鷹は化して鳩と成り、田鼠は鶉と化し、腐草は化して螢と成り、雀は大水に入りて蛤となり、雉子は海中に入り蜃と化す。是七十二候の書に載する所なり、其外山の芋うなぎと變じ、馬の尾化して蜂となり、夜は晝と成り、子は親となり、嫁は姑と成り、惡は善と成り、貧者は福者と成り、愚者は智者と成る。是皆天地の氣により、勤の功に依て變ずる事なり。

故に善を勤め行ふ時は、盛德の君子、又は佛神と成る事疑ふべからず。天地の妙一心靈は計りがたし、愚人は、物に變ある事を辨へしらぬゆゑ、物毎に疑ひ有りて爭ふなり。

此故に日用心を能用ひて道を學び、理を窮めて、物に變有る事を知れば、天地の内にあやしみ疑ふ事なきものなり。

患難用心之事

いか樣なる患難にあひても、深く憂ひ悲しむ間じき事なり。此界はたとへば海中の船に乘合たるが如きなり。難風にあひたる時、うろたへて艫へ行、舳へ廻りて悲しむといへども、皆同じ船なれば、我一人苦み少も益なし。其節に及びては、是過去の業因報ひ來りて、如此今果すものと心に觀念すれば、苦しみ却て悅びと變ずるものなり。

或時、船に大勢乘りける時、一人船頭に此船は幾日程にて着くべきやと問ひければ、順風なれば十日程にて着くべしと申ければ、彼者喜び、さては我用の間に合ふべきと思ひけるが、俄に風替り、十五日にても着かざれば、其者大きに歎き、我用の間に合はざるとて苦しみ氣色あしくつかれ臥しけるに、或る氣のゆうなる者ありて、我等

は何の用もなし、船の遲きこそ幸なれ、なぐさみとて樂しみけるに漸く廿日計りにて船着きければ、彼苦しみたる者はやつれ病者となり、漸くはひあがる。其外の人々何事なく心よくあがりける。是同船中なれども心の用ひ樣により、苦みと樂みとのふたつに成る事なり。

元來此世は、八苦の世界、或は穢土、火宅となり、貴賤高下共に苦む。因果はいづくに有りても遁れぬ事なれば、我一人の事の樣に苦むこと愚の至なり。故に、古人の敎に、無益の妄念を深く誡め給ふなり。爰を得と辨へて苦を除き、何事も物に任せ、常に樂しむ樣に心を用ひ習ひて勤むべき事なり。

願有時用心之事

世間の願ひは滿てざるをよしと思ふべし。たとへば、月滿つれば缺け、日中すれば昃くもの、充分なればこぼれ、草木も花咲きみのればこぼれ落つる事自然の理なり。

古人の語に、願は滿つべからず、欲はほしいまゝにすべからず、奢は長ずべからず、樂は極むべからずと誡め書き給ふ也。何事も充分なればこぼるゝと云ふ事を、誰も口には能くいへども、我身に受けて實に用ひ行ふもの稀なり。皆我分量を忘れて、物毎いやが上にも取り、集ふ上にも取り集ふ心の儘に貯へんと悉くむさぼり求むる故に、却て禍發りて身を亡ぼし、家をも失ふ事なり。此所を辨へ知りて、少し缺けめの有をば、身分相應の事なりと思ふ。何事も今日の上、天下泰平にて兵亂の憂なく、無事なるを何よりの樂みと悅び思ふべし。此人を、孔子曰、疏食をくらひ、水を飲み、肱をまげて枕とし、樂しみ其中に有りと云々。是皆心の用ゐ樣によりて貧者も能

く樂しむ所なり。

音信贈答用心之事

人に物を贈り進物する時は、何程かるき方へ遣すとても、心得有るべき事なり。

たとへば、花をすく人には、一枝にてもよき花を贈り、器を好く方へは輕き物にても綺麗なる物贈り、味ひをすく者には甘き物を遣す氣をつくべし。

勿論先にて祝儀か、佛事か、客を設くる日の間に合ふ樣に、相應の物を早く贈れば、先の心に叶ひ、一入悅びて悉く思ふ者なり。故に少々の物たりとも、見屆けて麁相の無き樣に調へて遣すべし。總じて、贈り物は信を表し、心の愛敬を外へあらはす禮義なれば、何程輕き物にても、自から親切に見屆け、麁相なき樣に遣すべし。尤も

返禮進物同斷なり。

古語に曰、恩を施しては念ふ事なかれ、惠を受けては忘るゝ事なかれと云へり。

世間交用心之事

人々交をなす時は、先づ氣を下し顏色をやはらげ、言葉をしづかに我身を謙りて、少もほこる心の出でざる樣に心を用ふべし。譬へば出る杭は打たるゝと云へり。大勢集會、或は祭禮などすべて物見の場にても、人より出過ぎてほこる者には、警固必杖を當て耻しむ。或は會席列坐の節も、其身分より上座するものをば惡みて、次へ引きさぐるものなり。誠に林中の高木は風にもまれて、一等低くければ風にあたらずとなむ、古人も云へり。此處を考へて諸事學問藝能に至るまで、我が分を顧みて、物毎うちはに出過ぎ指越のなきやう

にへり下り、少しも愚なるものゝ樣に言葉ずくなに身を持ちて交る時は、諸人に愛敬ありて、何國に有りても、惡み誹らるゝ事なく、禮義も厚く見にて、身分身持共によかるべし。是名聞を除く故、却て名聞他人に越ゆる所なり。又語に、凡そ宴會には和と恭敬をもつて主と爲すといへり。

人評判用心之事

貴人、高人、主君、又知德の有る人をば、すべて誹り評判いたす間敷事なり。たとへば、斯の如き人は、高山にまし〳〵て麓まで見給ふが如く、下の事をば能く知り給ふべし。又愚人小人の身として、高貴の人を評判するは、谷底に居て高山の上を善惡を云ふに異ならずして、中々是彼は能く見にざる事なり。又知德有る人は、深き井の水の如し。愚なる者は短きつるべ綱に似て、深き井の水を汲取事は及ばざるが如し、如斯及ばぬ事をかへり見て、我より上の事をば善惡ともに評判致すまじき事也。尤人の爲め悅ぶ事、善きと思ふ事をば、何事によらず、たとへ僞りなりと思ふとも、善き事ならば語るべし。善き事いふには障りなきものなり。又人の爲めにあしきと思ふ事いやがる事は、實の事にてもいふべからず。必らず障る事あるものなり。

斯く、平生心を用ひて口談をつゝしめば、人のうらみ誹りにて惡みを得る事なく、心身ともに一生安樂なるべし。孟子曰、言人之不善當如後患何云々。

恕の字用心之事

世間何事によらず、日用人の心を察して、うらみの無き樣に行ふは恕意なり。たとへば我身をつめりて人の痛さをしるが如くに、我身

に於て迷惑難儀と思ふ事をば、他の人も嘸迷惑に思ふべしと推量りて、人にゆづらぬ樣に心得るは勿論、我命の惜しきを辨へて、小蟲たりとも物の命を取る事極めてすまじき事なり。又よき事にて我も悦び樂しむ事をば、人も嘸ぞ好むべしと思ひて、他へ讓る心入を常に用ひて、日用我に恕心を以て人を恕する事を恕といふなり。故に心の如くとは書くなり。如斯にすれば、仁愛の義理則調ふものなり然れども、善き事を人にあたへて、其報をまつは、又人の道にあらず。

古人の語にも、與へて奪ふ事なかれ、何となく慈悲仁愛の志しにてする時は信恕の道と成りて、聖賢の敎に叶ふべきなり。此恕の道を主人下々へ用ひ、上たる人は廣く國民に施し給ふを、明君の善き御致事とは申すべし。子曰己が欲せざる所を、人に施す事なかれと誡め給ふなり。又一言にして行ふべきは恕なり。とものたまへり。

物忘れ用心之事

人の性によつて、一度事を聞きて忘れざる人あり。數度聞かねば覺らざる人あり。又幾度聞きても終に覺らざる者もあり。是皆過去世の因緣にて、一度にて能く覺ゆる人は、前生にて物事學びたる人なるが故に、今生れながらに能く通ずるなり。數遍にて覺ゆる者は、前生にて物學びはなけれども、今習ふが故なり。又百度聞きても終に覺ゆぬ者は、過去にて畜生の類なれども、善き緣にあふて此人界に生を受けたれども、人の道をば始めて聞く故に、遍を重ねても覺ゆぬ者なり。と古人ものたまへり。

つら〳〵是を思ひみるに、何程忘るゝ人たりとも、稽古にならぬ事は有るまじ。たとひ其身畜生なりとも、習ふによれば、猿の籠ぬけ

猫や鼠などの藝するを見よ。まして、人と成りては、精をだに出しなば、相應に用をたす程の覺ゆる事は成るべきものなり。大躰世の中を見るに、貴賤によらず、我は物覺にはならぬと言ふ人は、何を聞かせても鼻のさきにて聞き耳には聞かず、物毎うはの空なる心入の人なり。其内信心ありて耳より聞き心にも聞く人は、相應に覺ゆる事あるものなり。爰を考へて、忘れざる樣に心得たる人は、物毎を筆まめに書きて覺ゆに習ひ、又無筆の者は、心覺ゆに木を刻み糸を結びなどして、何々と事問ひたるもの口にとなふべし。或は使抔に行く時は、何の用幾つと指を折り、口に唱へ、後先の助語は忘れても苦からず、用のことをば、みちすがら口にくり、心にも辨へて行く時は、忘れぬものなり。誠に大事の用事をば即時に紙に書き、男は脇差の下げ緒を用ひ、女は指に結びつけ、或は、扇子に書きつける樣に、常に心を用ひ朝夕くせにする程に仕習ひなば、相應に覺ゆて用事足るべきなり。然れども、健忘といひて病あり。夫を治するには、古人いへり。戊子の日、東へさしてたる桃の枝を取り、三寸に切り、寢ぬる時枕にさすべし。又五月五日の未明に、是も東へ向きたる桃の枝を取りて、三寸に切り、衣裳のゐりにさし、或は人形を刻みて持ちてもよし。又七月石菖蒲の根、一寸に九節あるを取りて干粉にして、三日酒にて醉ぬ程呑めば、物忘れの病を治すことなり。又中庸に、人一度して之をよくせば、己百度せよ、人十度して之をよくせば、千度せよ、果して、此道を能くせば、愚なりといへども必明かなりと、聖人も教へ給ふなり。昔南都元興寺に、明詮といへる御人、十歳許りの時に、法宗旨を學ぶに、天性無器用にて、學問に退屈し給ふて、他處へ行んとて寺を出ける折しも、雨

ふりけるゆゑに、堂のきだはしに腰かけて雨の晴るゝを待居たるに軒の雫にて石の凹み穴と成りたるを見て思ひけるは、此わづかなる事にて堅き石を穿つ事は、是れここしなへに功を積む故なり。前の懈怠なりし事を悔悟りて、夫より立ち歸り、一夜も間斷なく勤めて後名高き僧都とは成り給ひしといへり。故に只放心なく、能く心を用ひて事を聞くたびに、心に得と納め置けば、覺ゑもよく智恵も出るべき事なり。

他行用心之事

貴人、高人、凡下に及ぶまで遠方へ出る時は、其身分相應に供人を連れ行くべきなり。

たとへば、大龍と成る時は、雲を興し、雨を降し、牛をも呑む程の勢さかんなるに、小蛇と變ずる時は、小兒の杖にも打れ、鳶烏にも

引きさきて喰はるべし。此理を辨へて、何程儉約を守る節なりとも他へ出行けば、其祿の格をば缺くまじき事なり。若し大變にあふ時後悔なき爲なり。

如此に、心を用ふる時は、其外藝能に至る迄能く志し勵みて、大龍の興りてさかんなるが如くに強く勤むべし。若し志小なれば、小蛇に勢なきが如くにて、何事も遂げぬものなり。

古人の語にも、志は大に、心は小ならん事をよしと云へり。

諫言用心之事

人に對し、教訓諫言する事は至て重き事にて、大抵の事には誰もせぬ事なり。災難に會はんとする時か、大勢難義に及ぶ時か、一國の歎きに成る事か、凡て大切の時ならでは諫は致さぬ事なれば、諫に預る人何程氣に合はぬ事にても、先つ心を鎭めて受け給ふべき事な

り。

たとへば、火災ある時に水を持ち行きて防ぎ救ふが如くに、即其人の大難を除く事を教ふる人なれば、至て忝なく親切に受け給ふべき事なり。

古歌にも

いふ異見思へばこそこと聞き受けよ
思はぬ中はいかでいふべき

されども、古人の詞の如く、金言耳に逆ひ、良藥口に苦しとて、常にすき好み給ふ事を改め直し給ふ事なれば、當分の淺き智にては中々受け給はざるのみならず、諫むる者の害と成事、古より多く有る事なり。此故に諫言をなさんと思ふ人は、能々靜かに工夫をめぐらし、時節を考へ、相應の古事譬へを以て、先樣よりおのづから其心

付きの出で給ふ樣にする事肝要なり。

昔物語に、異國にて吳王、楚國を貪り討ち取りて我物にせんとて度々評判ありける故、臣下皆諫めて止めんと數度に及べども、曾て受け給はずして曰く、重ねて此事を强て諫むる者あらば首をはねんと法度を出し給ひし故、其後は諫る臣下御前に出で手を打て大に笑ひければ、王曰卿今何をか笑ふと問ひ給ふ。答て云ふ。王の兵を發し給ふを笑ひ申にはあらず、私隣家に一人の男ありて、妻諸共に桑をつみに行きけるに、途にて容貌美しき女を見て、本妻を捨て、彼女を我妻にせんとて追ひ求むるに、求め得ずして暮に及びて歸り、さて本妻を探ぬるに妻は夫が他の女を求むるを怨み走り出、外の男を頼みていつともなく逃げ失せぬ。是を思ふに、一を取らんとて二を失ふ心の愚かなる事を存じ出して笑ひけると申上ければ、王、其か

たり譬へなる事を悟り給ひて、汝は、我あやまちを能く諫むるこの給ひて、頓て軍を收め給ふと云へり。是能く心を用ひて、外にたとへをなして、障のなき樣に諫むる故なり。凡そ教訓諫言する人は、此心を辨へて諫むべき者なり。孔子曰、木受ㇾ繩則直、君受ㇾ諫則聖也云々。

時節用心之事

日用其時を知りて用ふる事肝要也。其時といふは、譬へば、寢る時起る時、食する時を知り、悅ぶ時、悲む時、進む時、退く時、急ぐ時、急がぬ時、働く時、休む時を辨へて、人に物を出す時、人より物を受くる時、賞する時、罰する時あり。此の如く時を知りて勤むべき者也。或は、農人は春耕し、夏植ゑて、秋刈り、冬收むる、是皆一ヶ年に四つの時にて、是れに違はゞ、耕作成就せぬ者也。

然るに、寢ては起時を忘れ、悅ぶ時は悲しみある事を辨へず。酒色にふける時は、後に病を引出し、身の亡を忘れ。家業に怠れば、頓て貧に成りて難儀せん事を辨へず。物を借りては返す時を忘れ。あふ時は別れ有る事を辨へず。若き時學ばざれば、老て悔ゆる事を知らず。國制に背く時は、必刑にあふことを忘る。是に依て聖賢の教にも國に入ては先制法を問へこのたまふ。今殺生を好む者は地獄に墮るといふ事を信ぜず。生れて終に死する時を忘る。是皆日用其時の大切なる事を知らぬ故なり。

今日能く勤め置く時は、明日は心安し。若き時勤め學ぶべきは、老て能く樂むなり。

されども、天の時、地の利、氣の受け樣により、又前世の因果を報う時あり。

唐土の盜跖と曰へる者は、若き時より天下に顯れ終るといふは、其時にあへば也。夫子は、大聖人にておはしませども時にあひ給はねば何國にても用ひられ給はずといへり。又堯舜の御代政事正しく天下を能く治め給ふと雖も國に洪水大旱のありし事是亦天の時なり。又常人にも若き時より能く勤め行ひても災難にあひて一生空しく終る者あり。又生得の不行跡者に幸ありて無事に終る者もあり。是皆過去世善惡の報う時と、知るべし。然れども、天をも怨みず、人をも咎めず、皆其時なる事を辨へて、いよ〳〵善行をなす時は、子孫に必幸の時有るべし。

易にも、時の一字につづまるといへり。子曰。天何をか言ふや。四時行はれ百物生ず。と云々。其時の至つて人の成す事、たとへば。人有りて火に入り、井に落入る時、即時に取り上げざれば死す。又風吹く時、一星火物に移る時、速く消さざれば火災と成るが如し。故に衆人惡念邪欲少しもおこらば即時にしづめ、頭上の炎を拂ふが如くに急に鎭むべし。

凡て躰有る者は破れ、生ある者は滅する時を暫くも忘れず。脩行せずば有るべからず。

陰德用心之事

貴賤男女共に子孫長久に榮にん事を神佛諸天へ祈る人多し。然れども、其祈るしるしの更になき人も亦多し。されば、古歌に

祈りても驗なきこそ驗なれ
おのが心の信ならねば

たとへば、種物をも蒔かで實を取り收めんと願ふに似たり。歌の通りに驗のなきこそ實のしるしなるべし。

諸人皆過去世に於てなせし所の善惡の因によりて、今夫々に果報のある事は影の形に隨ふが如く、總て蒔かぬ種は生ざる者なり。親より何程財寶を受得ても、子孫の者に前世の因もなく、今又勤の缺けたる者は、何程諸天三寶へ祈りても其かひなく、不時の災難にあひ不慮の損亡ありて、讓られし財寶の失果るは此理也。

爰を辨へてよしなき事を祈らんより、先、人の道を習ひて、親に孝行、主君に忠信、師長によく仕へて、諸人に愛敬よく義理をかかぬ樣に常に陰德を積まば、惡は善に轉じ福者と成り、自づから子孫長久ならん事響の音に應ずるが如し。少も疑ふべからず。

司馬溫公曰、爲子孫長久計不如積陰德。

さて、其陰德といふは何事も人に知らせずして、物を施し、鳥類畜類に及ぶまでに、慈悲の心にて其者の爲に善き事を勤め行ふ事也。

陰德は、譬へば耳の鳴るが如し。我は能く知れども他の者は知らざる樣に惠み施す事なり。又顯して施し給ふは、直ちに草木の種を蒔きて實を取るが如し。相應に報うものの也。善惡共に種なうては果報なきものなり。此處をよく辨へて佛神へ祈願せんより今日を能く勤行ふべし。

古語に、陰德あれば、必らず陽報有りといへり。又曰積善の家には必ず餘慶あり。積不善の家には餘殃あり。と云々。

佛像堂塔建立用心之事

佛像伽藍供養法事等、皆施主の心ざす一念に因て善と惡との二つに成事なれば大切の事也。たとへば種を蒔ば其實に應じ苗を生ずるが如し。善因は善果を得、惡業を成せば惡の報ひ有る事は、影の形に隨ふが如し。

依て施主此處を能く考へて、先づ金銀財寶は、本世界の通寶にて、我物にあらず、過去の因に依りて、今假に得たる物なれば、惜むにたらずと思ひて、少しも貪る念を起さず、信心堅固に建立供養をなし、勿論、其働く工匠人夫に及ぶまで程よく價を渡して悦ぶ樣にすれば、造る所の佛像伽藍願の儘に莊嚴きれいに出來清淨なる靈場と成るに、佛歡喜し給ひ、神守り給ふが故に、火難風波の難もなく、是を見聞する所の衆生、たとへ惡人たりとも、其靈德に感じて惡心を轉じ、信心發菩提の因となるべし。然らば、其施主の長き福田となり、功德無量の善果を得べきもの也。然るに又驕慢の心にて名聞の爲になす所の建立は、本金銀財寶を實の物と思ふ故、金銀を惜みてなす故に、工匠人夫の價をもはぶき、上たる人は下々の過役を受けて迷惑するをも顧ず、取集め、人夫を苦しめ使ひて、其償ひなき

時は、是皆民を苦しめ取りたる身の油を以て造る物なれば、其苦しめる所の惡業は、皆地獄に墮つる業因と成るべし。是慈悲の潤ひなく、只苦しめる所の心火にて成す事なれば、此施主は惡業の因と成り、來世は必地獄に墮つべし。

昔も、宇治殿平等院建立し給ふて、阿彌陀堂供養の時、貴き聖人を招じ導師に賴み給へば、聖人の曰、御堂建立の施主分に、地獄へ墮させ給はんこそ淺ましく侍ると說き給ひければ、聽聞の人々興をさまし不思議に思ひけり。さて、供養終りて宇治殿、聖人へ向ひて此罪をば如何懺悔し侍るべきと、問ひ給ひければ、答曰。此御堂建立の間、唯非人の人を惱まし給ふを御得分の物にて償ひ返し給はば、目出度侍らむと申されける故、悉く皆尋ね出して、人夫に至るまで暇の分を下し給ひて清淨なる信心にて、民を潤して建立なし給ふ故

昔より今に至るまで、終に燒けたる事もなく損壞せずといへり。是を考ふる時は、道場、佛閣其外在家の作事等、尤も年忌吊ひ少の供養法事にても之れに準じて心得の有るべき事なり。畢竟、佛菩薩の大願は、拔苦與樂にて、一切衆生の苦を拔て樂をあたへ給ふ事なれば、佛事作善別して此心得にてなす時は、佛神諸天歡喜し給ひて、感應有るべき事なり。

脩行用心之事

道を學び行はんと思はば、僧俗、男女共に平生益なき妄想惡念を發す事なかれ。思ひ內に有らば色外にあらはるるといひて內になき物は少しも出ぬものなり。喩へば、硯箱より弓矢も出ず、料紙箱より鎗長刀の出たる事もなきが如くなり。然らば、常に恕を好み、人の難儀迷惑するをも顧ず、過言惡口して人を苦しめる人は、平生惡人なるが故と知るべし。又、常に人の爲、生類の爲に善き事をなし、悅ぶ事を言ふ人は、善心なる故なり。如此現世より善き心の勤めなくして、來世に至て、俄に善行善心に成るべからず。故に今大願を發し、常に惡念妄想を去り、眞實なる慈悲淸淨一般に圓かなる心に成らざれば、來世神にも、佛にもならざるなり。此段は、かりそめの事にあらず。一大事なれば、行住坐臥共に心を能く用ひて、工夫一偏に、信の淸淨心、明鏡の如く、虛靈不昧なれば、萬法能くうつりて、又止る事もなく、常にいふ事なす事、皆法に叶ひて、來世を待ずして、今日より大安樂の人と成てこそ未來の善果は疑ひなし。又惡道におつるも、死して後に惡心と成て、地獄に入にはあらず。今惡心になるが故に、常に惡言を吐て人を苦しめ、形うごけば盜をなし、或は人を害する故、現には訶責拷問にあひて苦しみ、勿論其

人に交るものまでも惡緣によるが故、難儀に及ぶ事、是今惡心と成るが故に、來世を待ずして緣ある者まで苦しむ事なり。爰を能く辨へて、間斷なく修行して、佛果を得べきものなり。

古語に、諸惡莫作、衆善奉行。是を日々三度誦し可勤事也。

念佛呪陀羅尼用心之事

念佛陀羅尼を唱ふる時、少しも疑ひの心を生ぜず、他念なく、一心にとなふべき事なり。

縱令、輕き呪なれども、似我蜂は、外の虫を捕り來りて、己が巢に入れ、似我〳〵と言ひて則蜂となし、又人の身にたむし有處に、南といふ字を書けば、癒ゆ。其いへたる跡へ、試に北といふ字を書けば、復前の田虫となる。又咽に魚の骨たちたる時、茶碗に水を入れ其中へ鵜の字を三つ書きて其水を呑めば、則ぬくる。又轉筋にて、

俄に筋引きつりて痛所を、木瓜々々といひてさすれば則愈ゆ。是皆輕きまじなひなれども、其驗目前に見ゆる所なり。況んや、佛說の其深遠なる妙呪佛名は、中々凡慮の及ぶ所にあらず。

應無所住而生其心。是は金剛經の偈也。此文を唱ふれば、一切の毒虫、惡獸悉く逃げ去る。予若年の時、試に此偈を唱へて手の內に蜂を握るに、少しも刺す事なし。誠に一切の陀羅尼は、諸佛の肝文を縮め込み給ふ要文なるゆゑ、諸病をも治し、願ひとして叶はずと云事なし。譯て南無阿彌陀佛の六字の名號は、無量壽佛、五劫の間思唯し給ひて、末世の衆生を西方極樂淨土へ救ひ取り給ふ要文にて、三世の佛菩薩は、八萬四千の法文を悉く込め給ふ故、六方恒河沙の諸佛護念し給ふなり。

既に中將姫は一心に名念佛し給ふて、女身ながら阿彌陀如來の引

接にあひ奉り、初方淨土へ往來し給ひしといへり。其外歷代の祖師より凡俗に至るまで、一心に念佛を唱へて極樂淨土へ往生の其驗ある事、古來書籍多く有る事擧げて數へ難し。或は、觀音大師、地藏菩薩の寶號を唱へて死罪を免れ、辨財天女の呪力にて天下の執權こ成り、藥師如來を念じて死病を轉じ、光明眞言の呪力にて業病を治し、亡者の苦を救ふ求聞持を行ひて、肉身にて不動尊に現じ、此外呪力にて雨を降らせ、敵を降伏し、天下の難病治し、國土安全を祈りて靈驗有る事、擧げて數へ難し。

如斯なりこ雖も、經文、念佛、呪陀羅尼等を疑ふ者は今人作曆を見て辨へ知るべし。

四季の移り替り、土用は專ら天氣、日蝕月蝕の缺盈時日方角まで少しも違ふ事なし。是を以て佛說、神書、聖賢の經傳に至るまで少しも疑はずして、心を能く用ひ、信心に讀誦すべき事なり。必ず其功空しからず。菩提心を成して、安樂の果を得ん事疑ひなし。

但し呪を誦しても其驗しのなき者は、未だ信心の至らざる所なり。

或は、過去世の業因極めて深き故こ知るべし。故に佛も定業は轉じ難しこ說き給ふ。爰を以て其罪を恐れ可愼事なり。

堪忍用心之事

何事によらず、平生堪忍を能く用ひて怒るまじき事なり。たこへば物をこらへず怒るは、火のもにたつが如くにて、胸中の心發れば、數年功を積みたる善根、功德も忽ち燒け失ふものなり。古人の語にも、一朝の怒に其身を失ふこ言へり。其怒腹立の本を見れば、凡夫は、日用の事を我に充分に叶はさんこ思ふ所に、少しにても違ふここあれば、忽に腹立ち怒るは、誠に愚なる事なり。太子憲法に曰。

人皆心にあり。各取事あり。彼れ、是なる時は我れ非とす。我れ、是なる時は、彼れ非とす。我れ必ず聖に非らず。彼れ必愚に非らず共に是凡夫而已。是非の理を誰か能く定むべき。相共に賢愚なる事環の端なきが如し。と教へ給へり。元來此世は堪忍世界と號して、常に物毎こらへしのばざれば、何事によらず成就せぬ事なり。たとへば、灸のあつきをこらへ、針の痛を忍び、藥の苦きを堪忍せざれば、病苦も除かず。或は晝夜勤の辛苦をもこらへざれば、忠にも孝にも、福德にもならず。勿論道に於て難行苦行の修行をも堪忍せざれば、成德の君子、智識、神にも佛にもならぬ事なり。此處を辨へ知りて、何程無理非道なる重き耻辱をあたふるとも、怒の念を發さず却て慈悲の心を發して是畢竟道を知らぬ故、惡事をなして、我も苦しみ、人をも迷惑さする事の不便さよと思ひて只空行鳥の跡なき樣

に觀じ習へば、自然と修行の功も積り、忍辱はらみつと成るべし。夫子曰。百行の本は忍を上とす。古語にも、百戰して百度勝とも一忍にはしかじといへり。又遺教經に云。忍爲德持戒苦行所不能及、行忍乃可名爲有力大人といへり。

善進用心之事

古典に曰。諸惡莫作、衆善奉行。是諸道の通誡にて、日用我心に少しなりとも惡と思ふ事をばなさず。善と思ふ事をば、卽ち勤め行ふ事なり。如斯卽時に改むる時は、千年の暗き洞も、一燈かかぐれば忽ち明らかに成が如くに、百年の愚なるも聞て改むる時は則智者と成り、大惡人も改めぬれば善人と成り、邪も正と成り、煩惱は菩提と成る。如是勤に依り變ずる者なれば、卽ち改めて菩提心を發し、信心工夫一般に成りて見性すれば、凡夫則佛と成る。只善に進むと

不進と、改むると不改と、勤と不勤との違ひなり。依て前後を不顧して身命財を投げうつて、信心堅固に精善に進む時は、則精進に、はらみつと成る事なり。

靜坐用心之事

心も躰も物毎にしづかにすべき事なり。譬へば、水の靜なる時は、月影の映るが如く、清き水にても動けば影の映らぬ事を辨へて、晝夜心身とも靜に仕習へば、自然と智慧も明かに、鏡の影の映るが如く、善惡邪正共に能く見にわかつべし。如此靜に心を用ひて、常に公案一般に修行するを、行住座臥の座禪と名づく。此場に於て虛空の如く一如と成る。是則禪定はらみつと成て見性すべし。

智慧用心之事

智慧は、元と明らかなるものなるが故に、鏡に譬へ、一切衆生に備へたる心鏡とす。されども、日用に妄念の雲を發して覆ふが故に、曇りて凡夫と成り、善惡邪正の譯も見にず、自然と名聞利慾に走りて、人をたぶらかして貪り取る事に、彼の曇りたる智慧を用ふる故に、惡智慧と成りて人を害し、身を失ひて未來惡道に落つるものなり。爰を能く辨へて靜坐安心すれば自然と妄念の雲はれて本來の心鏡現はるる事、朝日の出て照し給ふが如く明かになるが故に、善惡分ちて自づから大慈悲心發して、身を修め、人を治め、其心天地と一般と成り、即般若の智となりて、虛空の如く圓かに、一心の外に法なく佛なき事を覺りて、虛空も我も一如と成りて大安樂なるべし

心事一般用心之事

日用何によらず、心事共に一般に成る樣に平生心がけて勤むべき事なり。たとへば、書翰來る時戴きて見、御書拜見と返事するは是心

事共に一般なり。又いたゞかずして、拜見と書くは、一般にあらず故に念佛呪陀羅尼を唱ふるにも、口に誦して、心に他念妄想ある時は一般ならざる故、願も其しるし無き事也。内に他念なく、外に恭敬にして一心に誦する時、内外清淨に一般なるが故に、神明佛陀諸天へ通じ、清き水に月影の映るが如くに、必らず感應あるものなり又古人の曰。何事も愛敬を以てすれば、心事一般になると有る故に師長、又は主君たる人は、日用の言葉と行儀と表裏なく、一般なれば、子弟下々まで自づから勤方よく成るべし。

古語に、其身正しからざる時は、令すと雖ども從はず。云々。

誹謗用心之事

總て何れの法をも誹らぬものなれども、譯て佛法をば少しも誹るまじき事なり。譬へば誹るは天へ向ひて唾するが如く、天をけがさず

して、却て己が面を穢すものなり。と古人もいへり。又道を誹るは血を含んで人を穢さんと吐き懸るが如くにて、先づ己が口をけがすといへり。神儒佛の三法の中にも別して佛法は、三國共に國主大臣悉く尊敬し給ふ事なり。凡て、佛法は先づ戒めを受け、五逆十惡を除くべし。若し犯せば、現には刑罪にあひ、來世は惡道に墮して永く苦しむ事を敎へ。三世因果の報ひは、影の形に隨ふが如く少ものがれざる事を示し。又四恩とて、天地の恩、國主の恩、父母の恩、聖賢の恩、此大恩を可報。凡夫之を報ずるには、五戒、五常を持ち十惡を去り。上を重んじ、下を憐み。心直に身を正しくし。家を保つべし。故に常に我慢を去り、物毎和合に、世間出世間共爭ふ事なく、惡を除き善に進む事を、敎へ導き給ふ故に、佛法は天下國家御政道の第一益と成る事なり。誠に、天下の爲め雨を乞ひ、敵を伏し

亂を治め、國土安全を祈りて靈驗有る事、皆な人の知る所なり。今天下の萬民は、寺院の一判にて、天下國家の能く治まれる證據なり然るに、佛法は、本天竺の事にて、我國の法にあらずとて誹る者あり。儒も、我朝の道にはあらざれども、今三教共に心を正しくして、身を修め、人を治め、衆生の苦を、拔きて安樂ならしめん爲の道なり。中にも、佛法は、三國に通じ、わけて、本朝にて一千余年此方、天子より庶人に至るまで、尊敬し給ひて靈驗あらたなり。御法を誹る事は、畢竟小智故と知るべし。

聖德太子曰。學の本は、儒と釋と、神と也と。然るに其一方を好む者は、各二方を惡みて我が知る所を以て理となし、知らざる法を非となす事を、憲法に誡めて書き給ひしなり。こゝを辨へざる者は、我が知りたる道一筋を立てんと思ふは、譬へば、鼎の三足の中一足

を用ひ、二足を除らんと欲するが如し。是を辨へて片よらず、三教共に敬ひ、別て菩提心を發して、必以て法を誹るべからず。誹謗の罪は父を殺し母を殺し、阿羅漢を殺し和合僧を破り、佛身より血を出す。是れ五逆よりも重き罪なり。と佛の深く誡め給ふ故、能〳〵慎むべき事なり。

除妄念用心之事

常に妄念發するとて、さのみいとふべからず。譬へば百姓の稻の中なる草を取りて外へ捨る事なく、卽ち其根へ押込み置けば却て養ひと成るが如く。強ひて雜念を除かんとすれば、又一重の妄念を加へるといふものなり。凡夫の妄念は、永劫より此方、人の面に目鼻の有るが如く、薫習し來れる者なれば、今急には止め難き故、此處を辨へ知りて、漸々に修行するを頓悟漸修と示し給ふ也。此故に、妄

念に少しも頓着なく、只他念なく稱名念佛、或は工夫一偏になれば漫々たる星も、一輪の月出づれば、忽ち星の見ねざるが如し。之れを取り退けたるにはあらねども、月の光至て明なるが故なり。爰を以て能く辨へて信心圓になれば、眞如の月現れて、八萬四千の煩惱妄想忽ちに消ゆること疑ふべからず。

布施用心之事

物を施すには善惡虛實あるべき事なり。たとへば種を蒔くが如くに一粒の罌粟にても能實入たるを蒔けば、生育花咲みのりて盛なるものなり。又栗か胡桃の類大きなるを蒔くこと雖ども、實の入輕き物にても、眞實の心にて施す時は功德深き事なり。多く施といへども實なく、名聞利慾の爲に施す時は、實の入らぬ種を蒔くが如くにて、功德とも成らぬ者也。故に能く心を用ゐて少しも吝むの一念なく、菩提の爲になす布施物は、普く法界に通じて其功德無量なるべし。布施波羅密と成し佛神諸天三寶へ供養し奉れば、感應きごく有べき者なり。但し前には布施物を種物にたとへ、爰には無量なるべしとはいかん。答て云ふ。されば前には凡夫の心を云ひ、爰には菩提心の深きを云。凡夫の心は其器に應じて物の入るが如く、菩提心は無念無想のとゞくゆゑ、一炷の香氣にても法界へみりんし、一滴水も大海に入り、一味となれば無量につきざるが如し。古の長者の萬燈貧者の一燈、是れ虛と實となり。

受戒用心之事

僧俗男女ともに戒をば受け保つべき事なり。金剛寶戒章に戒を受けざる人は畜生に同じといへり。戒行はたとへば高き橋に欄干の有が

如し。暫くもなければ、弱き者には必怪我あやまち有るものなり。故に儒にも五常五倫の道を立て、不義に落ち入らぬ樣誡め、神道には正直を以て躰とし、誠信恭敬にして邪にならぬ樣に示し、佛道には五戒十戒。出家には四十八戒二百五十戒。比丘には五百戒を授け給ふて、欄干ありて落ちざる樣に細々教へ給ふ。若慎まざれば邪智惡趣に入り、現には刑罪にあひ、未來には惡道に落ちて永く苦しむ事を、如來深く悲み給ひ、戒律を立て置きて教へ給ふ也。

戒は、諸佛の道に入る大門也といへり。故に如來諸法の始めに、先づ戒を說き給ふと云へり。

上宮太子曰。心依戒理、德依戒成。衆僧は戒を受けて僧に入り、戒を破れば僧を出づとなり。無戒破戒の沙門、未だ自から度せずして何ぞ人を助けんや。別けて、此戒定惠の三學は、佛典の大綱也といへり。

出家在家の戒の品、智識に依て受けたもつべきなり。

燒香用心之事

祈禱法事の節、佛神諸天へ燒香並に先祖靈前へ香を燒く事は至て大切なる事故に、尊前より庶人に至るまで皆善智識上人を賴みて、燒香を成し給ふ事なり。總じて凡夫には常に利欲妄念の心有る故なり譬へば生類の人に打ち艱まされて、誰か怨み惡む心あれば、其一念忽ち彼のなやましたる者に通ず。苦しめなやましむる事、是皆一念心力のなす所なり。故に諸天三寶に供物を備へ花を立て香を燒く時の一念は、別して大切なるが故に、淸淨心なる上人を賴み、施主に代り燒香をなせば、其人の念ずる處卽香氣と同じく法界にみりんし別して其志す所能く通じて感應靈驗あるは此故なり。

說法明眼論曰。至心燒香木、天魔及波旬聞香失心退、猶如入死門、若聞惡臭氣、增力防功德、若人燒美香、魔倫趣他方、佛神歡喜、守修善必成就。

又曰。華開淨妙色、妙香散諸佛、若有華開、諸佛來坐、是故下界中以華爲淨土。

夫香の德は艶色の匂にあらず。好き香を燒は清淨無碍の眞香と成りて、普く法界にみりんする故に、佛歡喜し給ひ神至り、室淸く、人心澄んで內外清淨に成るといへり。既に香積世界にては、香を以て佛事となし、又香氣を以て飯として饑をやめ、香を聞きて一心を悟るといへり。好き香を常に身にふれば邪氣を拂ひて、神守り佛擁護し給ふなり。故に惡氣疫病惱さず。又心香を悟れば衆生を薰じ煩惱を消す。是則五分法身香なりと香記にも有り。之れを辨へて少しにても好き香をたくべし。若惡臭の香を燒かば臭氣を好む天魔邪神に通じて忽に便を得て來るべし。譬へば不淨穢なるもの有る時は其臭氣天地へ通る故、空を行く鳶烏、地を走る犬獸忽馳せ集りて爭ひ喰を見ても、惡臭の香を燒けば、邪神來り禍をなさむ事を辨へ知るべし。されども良香を求め得ざる人は、合歡木とてさいかちの葉に似て、かうかの木とも云ふ。其葉暮に及び毎夜しぼみとづる故、夜合木とも、ねむり木とも名づく。山林に多くある木なり。此葉を干して香に用ふべし。

神農本艸時珍の綱目に曰。合歡木の枝葉を煎じて用ひ、或は若葉の時湯びきて食すれば、怒を除き五臟を安んじ、志を和らげ、憂を去り、喜び樂しましめ。久しく服すれば身輕く目を明に、欲する所を得ることあり。如此德のある木の葉を香と成し用ふべし。

柴を庭に植置けば家内怒を除き、うれひなく、よろこび樂ましむる故に唐土にては、多く庭前に植置こいへり。又しきみ香もよし。但ししきみの木は庭に植うべからず。實に毒ありと云へり。心得べしある人予が作る家内用心集と此書とを見て難じて問ふ。古來聖賢の道を敎へ給ふ書籍其數多く有りて既に事足る然るに汝今愚なる詞にて書き集め何の益か有るこいへり。予が答に夫れ聖賢の書は譬へば時を打つ鐘鼓の如く其音大きに響くこいへども諸人常に耳なれたる故深く寢入たる者は目をさます事なし。然るに此書は小音を以て彼の寢入りたる者を呼ぶに似たり。予力なき故しるしなからんこいへども、呼び起すの端なれば、必ず側より大音にて起す人出づべきものなり。譬へば龍は一滴の水を得れば雨こなして、天下を普く潤す助けこ成るが如し。此書も又好き人出で龍の水を得たる如くし給は

ば、大幸にもならん而已。

家内用心集三卷の目次に寄する狂歌九十三首

夫道

其身先づ行儀正しく勤めなば婦は順ひて直なるべし。

女こそ奢の出づるものなれこ氣を能く付けて始末敎へよ。

女房の讒言を用ふれば必家の禍こなる。

婦道

男をば主人の如く敬ひて行儀正しく常につかへよ。

中言こ人の讒言いふまじこ女の勤め深く慎め。

婦の道は心正しく柔和にて家の始末を第一にせよ。

男女別

我よりも年の勝れる女をば母や姉そこ耻ぢて敬へ。

我身より若き男女を見る時は弟妹と思ひつゝしめ。
假にても不義たはふれをなす故にうき名を取りて後の禍。

家事

家持は我身正しく行ひて親子兄弟夫婦したしめ。
何事も奢をやめて儉約を守るは家の祈禱なりけり。
一年の入を計りて出しなばいつもゆたかに家をたもたん。

金銀

いらぬ物價安くも買ずして無て叶はぬ物を求めよ。
限り有る財を持ちて限なき事につかはばいかでたもたん。
一年の取物成を四つに分け一つ殘せば末は榮にる。

子弟

君に忠親に孝行朋友に信を成せよと常に敎ゐよ。

我家の業を偏に習はせて其餘の藝は隙に任せよ。
若きより家業學問習はねば老ては悔むものと知るべし。

兄弟

兄弟と品こそかはれ親の身を分たる此身深く慎しめ。
兄弟は我手の指の如くなり何れをそれと分て捨めや。
兄弟睦みしたしみ孝あらばさぞや父母うれしかるらん。

奴僕

思へただつかふも人の思ひ子よ我思ひ子に思ひくらべて。
下部こそ兼て愚の者なれば只幾度も事を敎へよ。
情かけ敎へて聞かぬ者なればなじまぬ先に暇出せよ。

言語

禍は口より出て身の毒は口より入るぞ常に慎しめ。

本よりも思はぬ事は口よりも出でぬものぞと内を慎しめ。
善こいひ悪こいふのも口なれば善言いふを口癖にせよ。

鎭火

火燵よりゐろり竈やへっついの火の元見よと口癖にせよ。
炭薪藏の廻りに置かぬもの土をば煉て近く置くべし。
風吹けば家財片付始末して急火の時に早く仕舞よ。

出火用心

火本をば消こ家財は自から殘るものぞこ早く防げよ。
遠くこも風吹く火事は油斷すな知死期の度に替り吹く物。
火事の節年寄妻子行所兼て方角定め聞せよ。
藏の内戸前窓ぎはすかし置き火氣のあたらぬ壁ぎはもされ。
藏の内蠟燭多く燈し置き土戸立つれば火氣は通らず。

燒け殘る藏をば早く明けぬものかべに水かけさめて開けよ。

病慎

病こそ身の苦しみの元なれば少しの時に早く治すべし。
病にも應ぜぬ藥用ふれば煩ひかさみ實やくるしむ。
病こそ酒色飽食風寒を慎しまざるに發るものなり。

看病

病人の心を計り思ひつゝ慈悲を發して退屈さすな。
看病は藥の應ふこ應はざるこ食のよしあし氣を付けてせよ。
わづらへば氣こそ短く成るものぞ夫れに應じて腹を立たすな。

白涙

盗人は家の樣子を能くしるかさては内より手引き有るべし。
用心は常に嚴しく手道具を近くに置けば入らぬ白涙。

家の内勞れふしたる其時は主人氣をつけ用心をせよ。

他人用心

中絶にていつ音信も無き人は親類なりと心ゆるすな。
何國にていかなる科をなしつらん慥ならざる人は宿すな。
金銀の請は損じて濟がたし命をたつは人の請合。

亭主

振舞はすべし綺麗にもてなしは一種成共親切にせよ。
飲食は輕く强るが禮義なり重く强るは無禮なるべし。
勝手にて高聲笑ひ物音を客やきかんと心つくべし。

客人

かりそめに振舞はれつゝ行くとても衣服改め行くぞ禮式。
客と成り催し人の呼ぶ時は一度使に早く行くべし。

客と成り掃除や料理床前に心をつけて讃よ客人。

朋友

朋友は始めの心末までも替らで信つとめ行なへ。
善友は醫者、智者、福者、老人と心直に勤よき人。
惡友は貪欲愚痴と博奕うち心邪勤なき人。

酒宴

酒はたゞすぎざる程に心よく飲めば樂しみ藥ともなる。
酒こそはすぐれば心火もに上り精血かわき命ちゞまる。
身を忘れ晝夜に酒を飲む時は命も家も共に亡びん。

養父母

もらひ子は接穂に同じ柔かに養育なせば末は榮にる。
似我蜂に習ひて養子こり立てよ子を子こせぬは蜂に劣れり。

實の子は不仁なりとも其儘にやる方なきに思ひくらべよ。

養子

行からは實の親より大切に影をもふまで厚く敬へ。
日を重ね馴染めば氣儘出づるもの不孝は科と深く慎しめ。
何よりも重き家財を讓る親心に深く恩を忘るな。

老人

年寄は酒色飲食慎みて長病せじと常にたしなめ。
言ひのこすことあるならば老の身の無事なる時に兼て書き置け。
年寄は陰德つめよ子の爲めに常に念佛座禪なすべし。

奉公

奉公の始めの心末までも替らぬ人にあやまちはなし。
其家の風儀掟を能く守れ是は其身の祈禱なりけり。

何事も皆我物と思ひなし表裏なく常に勤めよ。

旅立

宿こりて亭主の名聞き見知り置き名所方角名產をこへ。
早く起き手水髮結したくせよ食もすゝみて手廻ぞよき。
錢わらじ宿こる前に買ふぞよき宿の拂は立さまにせよ。
急ぐこもあやうき夜道慎めよ怪我して後は悔ひてかへらず。

農業

農業は下部牛馬の類ひまで働くものに憐みをせよ。
種の品色々多く蒔く時はいつも中作損はなきもの。

工匠

細工をばすべて律義に念を入れ約をたがへず常に拵げよ。
職人は分けて酒色こ碁將碁は我身の惡こ深く慎め。

玉磨は工夫細工にしくはなし家は榮にて心樂しむ。

商人

商人は愛敬有りて筆まめに算盤こりて安くあきなへ。
借物は濟方時を違へずば誰も寶を貸ものと知れ。
利を取を只楠に習ふべし年に一寸後は大木。

興樂

法の道背かで家業よく勤め家内和するぞ樂しかりける。
飢凍に病みて苦しむ世の中にさもなく送る身こそ安けれ。
世の中に求め樂しむ樂しみは必後の苦しみとなる。

家内制詞十五條に寄する愚歌三十首

朝起用心

早く起き手水髪結其家の業を勤むる家は繁昌。

朝早く門の戸開き掃除して賣物かざる店は賑ふ

神佛尊敬

早く起き手水髪結神佛先祖を拜み家業務めよ。
無事にして家業能くする其家は諸天佛神加護と知るべし。

商事

人多く來るは善なり其人を疎畧になさで愛敬をせよ。
買ずしてむなしく歸る其人も以後の爲めぞと疎畧ばしすな。

公私の用事

公邊の御用は勿論其外の少しの用も帳につけおけ。
筆まめに物事帳につけ置けば益あるものと常に知るべし。

御用の慎

神佛國の主の御用をば物にのせおき下に置くなよ。

御用には忌こ穢の火を除き家内手傳慎をなせ。

細工の吟味

細工せば家内打寄善悪をたがひに言ひて直せ人々。
玉すりの細工に習へ諸職人みがく數度光り出づるぞ。

賣物の用心

賣物を見せにつかはす其時は代りを取りて何國へもやれ。
賣掛こ死したる者こ同じ事二度見ぬ今の世の中。

風烈時

大風に遠く行くには火事の爲家財を仕舞行けば悔なし。
春秋に屋ねの修覆をする時は大風吹こ心安きぞ。

買物

いつこても炭や薪を買ふならば俄雨風さては暮かた。

炭薪賣りかねたるを買ふ時は賣て悦び買て益あり。

野菜調へ

寒き時置きて替らぬ野菜をば安くば多く買て置くべし。
暑き時安くも買ふな野菜をば置て變るを食ふは毒なり。

人逢ふ時

藝能の有る人くれば其業を先をあがめて聞くは德あり。
人の上噂ばなしは時過ぎてうれひわざはひ有る者こしれ。

掛賣無用

掛賣は必止よ今の世は貸ては濟まぬ浮世なりけり。

風俗用心

風儀にて心も知るゝ物なれば日々に氣をつけ直せ諸人。

遠慮用心

物ごとを遠く計りてなさざれば必近き憂ひあるもの。

若し急の用事もあらば氣を鎭め心落付け書附てせよ。

月並用心

月毎に十日廿日卅日には藏の上下片付て、おけ。

月並に三度四度も賣物の有無を見て置け益は多きぞ。

是より續用心譬物語上下の巻の目次に寄する愚歌五十二首

精勤

務こそ價もいらぬ寶ぞと人にも教へ我も勤めよ。

神と成佛と成も何故ぞ善道つとむ人ごこそしれ。

勤は長壽と成

長壽には身を働くにしくはなし流れの水のくさらぬを見よ。

若きより酒色飽食美食とを減べ慎む人は長命。

食事

食物はとり合せにて毒と成り又は藥と成るぞつゝしめ。

食物は厚味を省き淡き物少しく食ふは無病長命。

變化

春と夏秋冬晝夜變れども急に變るは命なるべし。

貧しきも拵に富と變ずれば只居る者は破家に變ぜん。

患難

患難は誰も遁れぬものぞかし火宅に住める世の習ひとて。

元よりも此世は假の宿なりと思ひ堪ねて忍べ世の中。

諸願

願ひこそ思ふてたらぬ程ぞよき滿れば缺くる月を見て知れ。

古の聖も願のみてざるをよしこそ教へたまへれ。

音信

音信を疎略になしてやる時は貰ひながらも腹や立らん。
音づれは心の信顕すぞ少しの物も深切にせよ。

人交

交りは他より我身を謙り言葉靜かに愛敬をせよ。

評判

評判に善き事いふはせめてよし惡き噂は後の禍。
評判をいふにつけても己が身のたらぬ事をば人は言ふらん。

恕字

恕の字をば心の如こ書を見て己が心に思ひ行へ。
己が身に好める物の有る時は人もさこそこあたへほどこせ。

他行

他行せば其の身に應じ供人を連行時は變に悔なし。
他行には先にて變の有りとしれ兼て思へば後の悔なし。

諫言

諫こそ信の道に有なれば心靜に眞實になせ。
何よりも忠孝なるが諫なり君を誠に善にすゝめよ。

時節

天の時地の利にたがふ種物は何を植ゑても實のらざるもの。

陰德

陰德は陽報ありと古の聖の教今も替らず。
陰德は我耳のなるたとへにて我は知れども人に知られず。

建立

寺を立て佛を造る功德より人を勞せず施をなせ。
名の爲に人を勞する造立は只居るよりも重き罪人。

燒香

燒光は只一念と諸共に天地に通ふ物ぞつつしめ。
香煙法界みりん花はこれ佛のうてな清くなすべし。

心事一般

一般は心躰ともに違ひなく勤め行ふものと知るべし。
內外なく只一般に善き事を勤め行ふ人は善き人。

修行

修行をば他の思ひなく一筋に勤め行ふ事と知るべし。
何事も修して行ふ德により聖賢知識さては福人。

呪陀羅尼

だらにをば只一心に他念なく誦すれば徵し有るものとしれ。

妄念

何となく眞如の月を見る時は思慮妄念の雲もかからず。

布施

布施物は只何となく施せよ取と思ふなやると思はで。
五常ありて又も五戒をたもてるは道を知りたる善人ぞかし。

堪忍

世の中は忍の一字に止ると聖の敎へ深くつつしめ。
辛勞をこらへ忍びて勤むれば忠孝福と成ると知るべし。

精進

精進は善に精く進む事すゝまぬものは本の小人。
善きことに精しく進む其勤め今見る智識上人としれ。

靜座

靜座こそ清き止りの水に似て眞如の月の影やうつらん。
清き水有りといへども動く時浪立つ故に月もうつらず。

智慧

曇なき智慧は世界を照せども曇はつれば身をもまごはす。
直なる智慧の鏡は明らけく善惡見にて影や殘らん。

雜愚歌二十七首

年始

年始には月と日と又三寶と君と先祖を祭り拜せよ。
一こせを計るは春に有なれば四つの民まで思ひ廻らせ。
春は只物を生ずる時なれば罪する事は深く慎しめ。

歲暮

一こせを事なく送り暮なれば祝ひ納めて物を慎しめ。
除夕には白木を燒きて邪を拂ひ有明灯來る春をまて。
除夕には小豆麻の實三九づつ夜半に井に入れ疫をのがれよ。

親の道

我子をば人の子となしみる時は其善惡もかくれなからん。
善き事も惡きも傳る子の心親の行跡常にたしなめ。
子の爲めに寶集めて讓るより只善道を敎へ育てよ。

子の道

父母の身をわけてたる我なれば賊はぬこそ孝の本なれ。
何事も親の心に背かじと恩を忘れず深く敬へ。
一人り子を思ふ心に父母を晝夜忘れず孝行をせよ。

師道

愚なる弟子を取立教へなばひとりなり共重き善根。
何事も師の風俗は傳るもの我身を修め人に教へよ。
教へには常の行跡先こせよ文の學びは後になすべし。

弟子慎

師の影は七尺去つて蹈まぬまで深く敬ひ慎をなせ。
忘れなば只幾度もくり返せ人は一度我は百度。
書き集めしぶ〳〵ながら學び置き熟せば後に甘き味ひ。

貸借

偽らで濟方時を違へずば惜まで財かす物こ知れ。
物を借疎略になさで用立てば早く返して恩を忘れな。
物を借り損なひ遲くかへしなば後には貸さぬ物こ知るべし。

業人

誰もいや朝寢短氣に色ぐるひ大酒ばくち無禮夜歩き。
長居して小歌三味線芝居ずき目明だてこそ人の毒なれ。
生れきて命惜まぬ者はなし只慈悲心にものを助けよ。
藥には朝起夜詰儉約こ學問禮義算こ知るべし。
たからこは忠こ正直孝行こ堪忍慈悲こ勤めつゝしみ。
日々三度我身の程を顧りみて善惡物に應じ勤めよ。
右之卷を幾度も〳〵讀み覺に、道理をよく辨へ、勤行の違はぬ樣に
平生心懸くべし。然る上は心の礎確こ居りて物事に過ちなし。若惡
敗友に誘れて遊里などへ行くこも、早速孝悌忠信五常の手本を以て
一心を元の如く興しする、家業を精出しなば、壽命長延して此家鐵
城の如くに、來る數百年も限りなく相續繁榮すべし。殊更本書の如
く奢は家を亡ぼし、儉約は家を潤ほす、厚味は身命を害し。麁食は

長壽を保こいふ事諸書共詳なり。併し我勝手の爲と而已思はば心持賤しくなるなり。又天下の爲と心得る時は、寛仁大度の心こや云はん。遊び暮して珍膳美味を食はんより。家業を能く勤め香物菜などにても食ふ方よく身を養ふなり。又飯は四五椀食ても一二椀食ても平生の習ひにてさのみ變る事なし。其少し宛ひかへ七八分目に食るは、養生よく長壽を保つ而已ならず、我れ思はず天地間の生類を、何にても救ふ道理なり。たとへ半椀一口にても、餘す食物は人が食ざれば、何にても養ひを受くべし。高位富者にても、毎日人を救ふ事はなし難し、夫々我れ思はず養を施す事甚冥加に叶ふなり。知れたる事なれども、君子の樂しみに心附かぬ故、奢に長じ冥加につきるもの其數を知らず、特け大阪は何國よりも奢甚敷ものなり、衣食住に限らず、塵埃、木切に至るまで無益に朽ち捨る事は奢の部なり薪屑も京都の如く心をつけて燒ならば、一箇年に凡九萬駄程燒延ばすべし。大阪中家數は凡二十萬軒、一軒に割木一本宛にしても一日に二百五十駄、一箇月七千五駄、一箇年に九萬駄なり。但し割木一本凡五十目、一駄四十貫目の積りなり。此大分の割木は數十年來天地雨露の惠みを受け、其上人力を以て深山より伐り出したる勤苦を思ひ計りて費すべからず。

但し一人前一日に木一本宛米一合宛

一箇月に割木壹貫五百目　米三升

一箇年に割木拾八貫目　米三斗六升

一箇年に割木百八拾貫目　米三石六斗

右に準じ萬事思ひはかるべし。此上奢增長せば愈々冥加につき、如

何なる天罰を蒙むるべきや恐るべし慎むべし。享和九年甲辰三月廿一日の大火は、幸橋北詰より天満まで燒け通り長町へ火廻り、夫より方々へ火移り大火となり、人多く損ず。其外度々の洪水、津浪、大地震、飢饉にて夥しく人死したるを思ひ出して、冥加に盡きざる樣に用心有るべし。久しく無事靜謐の御代に生れし人は、苦勞を知らず、殊更繁華の地に遊ぶ人は慰みに事を欠き、うから〳〵と飛びたがるこそうたてけれ。餘力有らば學問に心がくべし。文字多く覺になば、日本はさて置き、萬國數千年の昔より色々の古實金言抔面白きもの限り有るべからず。常々、我々の事たる樣を知りて外を求むる心有るべからず。しからばなどか一生を案ずる事あるべけんや。

なき物をしだす寶の手をもちて

只おく人は破家ここそ知れ

本書轉寫の際誤まりし文字又は義理の通ぜざりし所は前後の文意より判斷訂正せし箇所多かりしかど猶ほ誤字あるを免れず、讀者潛心著者が心意の有る所を探求せば幸甚し。

寫者某識

用心譬喩草（終）

267
795

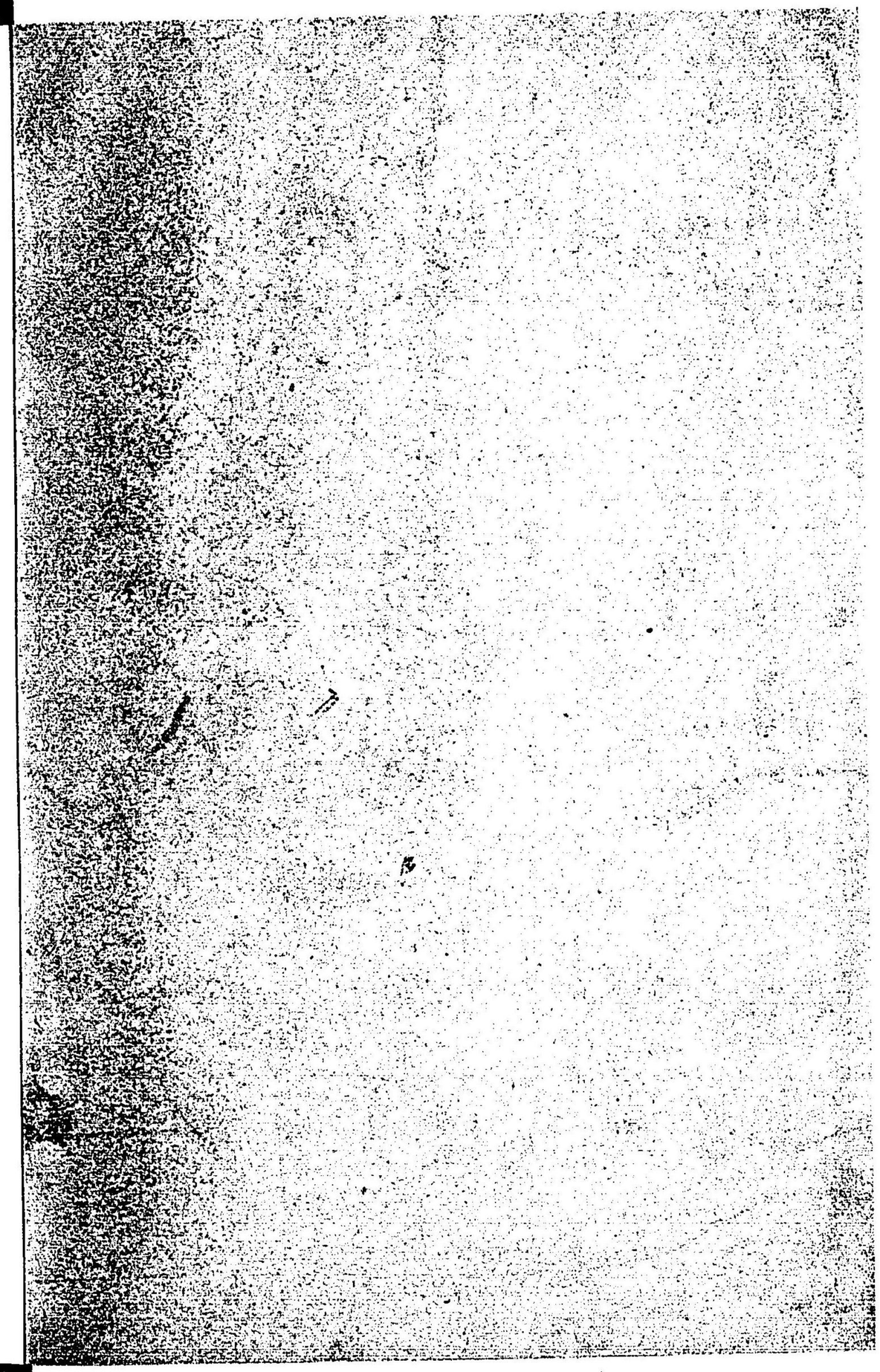
明治四十五年六月十日印刷
同　年六月十五日發行

施本

發行者　堺市宿院町西三丁目一番地　生島嘉久次郎

印刷者　大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地　井下幸三郎

施販者　生島嘉久次郎



特18
948

用心譬喻草

国立国会図書館

019218-000-8

特18-948

用心譬喻草

生島　養老/記

M45.6

ABF-2810